

ITP-TUFS 2008 年度派遣報告書

幸加木 文

2008 年度の東京外国語大学若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラムによる派遣期間中に行った研究・調査について報告する。2008 年 8 月 5 日から 2009 年 3 月 31 日までの約 7 カ月間、トルコ共和国のイスタンブール・ビルギ大学欧州連合研究所所長のアイハン・カヤ教授の下で、現代トルコにおける国家の正統性とイスラームという題目で、現代トルコのイスラーム思想・運動と世俗主義概念に関連する調査を行った。

まず、派遣先であるイスタンブール・ビルギ大学にて学ぶ機会を得た感触は、当大学は自由度の高さという点でトルコ随一であるということだった（具体的な事例は 2008 年 10 月次のレポートの通り）。指導教員のカヤ先生には自分の論文へのコメントを頂き、また参考文献を提示頂くなどの研究指導を受けた。さらに、欧州とトルコの比較の視点から宗教的アイデンティティに関連したご研究からも大いに学ぶ機会を得ることができた。

次に、2008 年度派遣の研究概要および成果について報告する。「世俗主義」とイスラームを軸とした政教関係という視角から、主として 1960～70 年代以降、この関係性に生じている変容の過程と様態を、様々な言説資料を基に跡付けていくことを骨子とし、以下の 2 点について調査を行った。第 1 に、「世俗主義」概念に関連する議論の歴史的経緯と、その議論の社会変化に応じた多様化について、第 2 に、その多様化する「世俗主義」議論の主たる担い手でもある「イスラーム派」の人々の思想・言説および動態についてである。

1 点目の「世俗主義」概念に関連する議論について、ビルギ大学の図書館やイスラーム研究センター（ISAM）を利用し、トルコ語文献の調査を行った。また、近年に出版された書籍は、書店や古書店、ブックフェアなどで収集した。調査の結果、1950 年代から 60 年代に出版され、70 年代以降の議論の基礎となる文献をはじめとして、「世俗主義」をイスラーム法の観点、あるいは近代化や民主化の観点等から論じる多くの文献の他に、1990 年代後半の「2 月 28 日過程」と呼ばれるトルコの政治変動との関連で分析したものなど、現在の多様な議論を反映した膨大なトルコ語文献・著書の存在を確認した。

今後は、入手した著書の内、先行研究となる文献を押さえながら、一次資料を読解し、1960～70 年代の「世俗主義」観と現代の「イスラーム派」の「世俗主義」解釈の比較検討など、トルコの政治・社会的変化と「世俗主義」関連の言説とを関連付けながら、通時的に把握していきたいと考えている。

2 点目の「イスラーム派」の思想・言説、運動に関する調査については、「イスラーム派」の関連団体に所属する人々を対象に聞き取りを行い、また彼らが主宰する講演会等に参加した。その結果、目的に即した新たな知見を得ることができたことその他、トルコで書かれた種々の文献や言説の行間を忖度し、精読するために必要とされる様々な背景知識を徐々に理解することができるようになってきた。この点は今後一次資料を読解する際には肝要

であり、留学の成果の一部であったと考える。同時に、こうした過程ではトルコ人の友人たちに自分のトルコ語文章の添削をしてもらうなどし、その積み重ねがトルコ語によるコミュニケーション力の向上においては、何よりも力になったように思う。

他方で、聞き取りにおいては、他の文献の裏付けに資するコメントを得るという点では有益ではあったが、あたかも想定問答集があるかのような予想された範囲内の言説が返ってくることも多かったという点に、自分の研究アプローチの再考の必要性を強く感じた。また、聞き取りの結果を論文引用する段にはトルコの政治社会状況を踏まえた配慮を要する点をどのようにクリアするか、今後の課題として残った。

さらに、関連研究をしているトルコの研究者や知識人と面談をする機会があったが、トルコの政治社会に関して「当事者」である人々の真剣な議論を聞き得たことも有意義であった。結果として、外国人研究者としての限界を感じさせられることもあったが、改めて外国人としての外からの視点のあり様を模索するよりないことを痛感した。

その他、政治情勢に牽引された社会変化を、目に見える範囲ではあるが、直接観察できたことは得難い経験となった。その一部は月次レポートの写真とそのキャプションで報告した通りである。また、当初考えていた以上にトルコではイスラームが身近に深く根付いていることを感じ、現代の宗教的運動や思想を捉える視点を再度見直す契機ともなった。

以上の調査成果は今後学会の口頭発表や論文としてまとめていきたいと考えているが、直近の機会としては、2009年8月にオランダのLeiden大学にて開催される国際ワークショップでの発表を予定している。

2008年度の派遣期間中の研究活動における反省点としては、研究を論文という形にして発表することに対する努力と能力が不足していたことが挙げられる。今後の課題としては、誤解のない明瞭で説得力のある論述をする、査読結果に即して的確に修正するといった基本的な技能を高めることに、より一層意識的に取り組みたいと考えている。併せて、各研究者の問題意識自体には大差がない中、いかにオリジナルの切り口と結論を見だし、それを迅速に論文にまとめるために何をすべきかを考え、自分に欠けている力を習得する必要があると感じている。同時に、方法論・アプローチを模索し研究を進める過程で博士論文の再検討も視野に研究を進めたいと考えている。

末筆ながら、今回の派遣期間中にはトルコ・日本双方において多くの方々のお力添えと励ましを頂いた。それぞれにお忙しい時間を縫って対応して下さった方々に深く感謝申し上げます。